主体美術

SHUTAI-BIJYUTSU

主体美術協会は、1964年に結成されました。
私達は作家一人一人が創作を自由に発表出来る場を確保し、美術家の集団として積極的に活動していきたいと思います。
私達は世界的な視野に立って、豊かな人間性を培いつつ、現実の日本に深く根を下ろした生新な芸術を創造していくことを期しております。

発行：主体美術協会事務局
〒115-0055
東京都北区赤羽西6-34-8
返町勝治方　TEL / FAX 03(6326)9262

2017.8
No.101

森 芳雄 没後20年 特集

CONTENTS

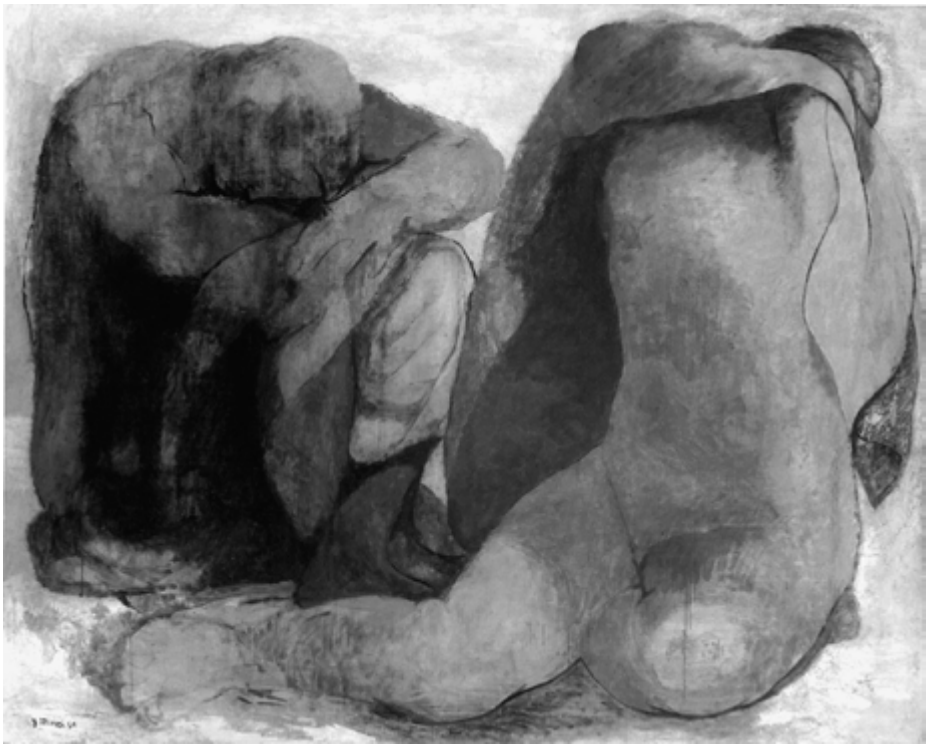
1p 森 芳雄素描
2p 森 芳雄 没後20年
森 芳雄の言葉 ……山﨑　弘
3p 企画展示 森 芳雄 没後20年 について ……山本　靖久
4p 「りんご」と「母子像」 ……中城　芳裕
画家 森 芳雄の一断面 ……小菅　光夫
5p 井上俊郎さんを悼む ……榎本香菜子
宮崎照雄さんを偲んで ……有馬　久二
6p 奥井章夫さんを偲んで ……津田　益夫
研究部からのお知らせ
第53回主体展2017 研究講演会
野見山 暁治氏 講演
「森 芳雄の生きた時代」
7p アトリエ訪問 vol.1
「第三の男」に魅せられて
ー佐藤善勇さん
8p インフォメーション
展覧会記録
2017年第53回主体展日程
編集後記・その他

森 芳雄　「無題（座す女・ヌード）」

第53回主体展では、企画展示「森　芳雄没後20年」をおこないます。

1964年の主体美術協会創立時に代表としてご尽力なさり、その後も長く常に会の中心作家として活躍された森氏の作品20点余と愛蔵品などを併せて展示します。なかでもご遺族の格別のご厚意でお借りすることが出来た未完成の絶筆「描きはじめ」は、白いキャンバスに走る木炭の線が期待と緊張感をはらんで、強く想像力を喚起されるものです。通常なら決して目にすることのできない貴重な展示になることと思います

私が油絵に惹かれたのは〝動き〟のため、動きがあるということ。ある瞬間の動作を永遠のフォルムの中に入れている。



「二人」(F100)1950年

「画家森芳雄 平成元年80歳」(市村勲撮影)より

森 芳雄の言葉

山崎　弘

今から35年程前、私は大学院を出て森芳雄先生に師事した。先生が亡くなるまでの15年ほどの間に先生が私に語ってくださった言葉を、森芳雄を知らない若い皆さんに届けようと思う。これは、先生のアトリエでの言葉。

「写真は古いものを見ると古く感じる。30年前のを見ると風俗も古臭く感じる。しかし絵はどうだ。描かれているものは古くても別に気にならないだろう。新しく新鮮に見える。不思議だな。ルネッサンスのデッサンが500年経ってる今でも新鮮だ。この前婦人雑誌社の人が来てデッサンを載せたいというので、スケッチを見せた。雑誌の為に描くのは嫌だから。そしたら30年前のわら半紙に描いて黄色くなった果物のデッサンを見て、これを載せたいと言う。素人でも俺のあのどうしようもない時に描いたやつを見ていいと感じてくれる。何とも言えない気持ちだよ。あの頃は武蔵野(美術大学)の講師になる前で精神的にズタズタだった頃だ。俺は文も書けなければ音楽もできない。だから小さくてもいいからスケッチブックに描いていた。俺は描くことしかできないから。それで歌うしかないから。自分でそっとしまっといた。捨てようかと思ったが生きてる唯一の証だ。それが30年も経って何かを感じてくれる。この時間の不思議さ、何とも言えないね。」

「この前松涛美術館でやったが(1981年の森芳雄展)、若い頃の『枝のある静物』の絵が一番いいと言われた。それじゃあそれ以降退歩してるのか? それ以降は無駄なのか?　そうではない。それ以降の仕事があったから、今、若い頃の作品をみてくれる。その時に止めていたらその絵はとってくれないだろう、今頃ゴミ箱だ。いいか、ここが大切だぞ、今いい絵を描いていたら、後の仕事によって今の絵をみてくれる。今の絵を大切にしろ。誰が何といおうとその絵で喜びを得たものを大切にしろ。」

「これだと思って描いているとまたダメになってしまう。しかしこの繰り返しだ。これだと思って描き続けていて、知らない間に6か月経って、何の感動もしないものもある。これだと思ったものをよく問うてみよ。」

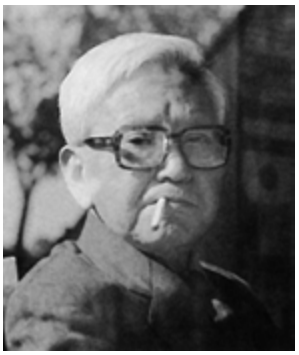
「しばらく中断していると熱意が無くなってやる気が無くなってしまう。かといってずっと描いていると細かい部分に目がいってしまって行き詰ってしまう。どのくらい描いてどのくらい間を置くかが難しいところだ。」

「描けなくてのらなくて義務的に描くのは嫌だから描かなかったらとんでもないことになった。どうしようもならないことになった。失敗だ。描き続けなくてはダメだ。この仕事はあくまで自主的なければならない。描くとき、情動というものを生かして描きなさい。それは外に出たいとか○○を描きたいということもあるし、あるいは生活の中での素晴らしいこと心動かされたことを取り入れるということもある。絵を描くことは楽しくなくちゃ。楽しいからと言っても低次元のものから高いものまであるよ。大家と言われる人はそれだけ高いものを持ってるんだ。楽しくなくてはダメだ。やたらアクロバットをやって、奇抜なことをやっても社会には貢献できない。一番いけないことは虚無的になることだ。これが一番いけない。生きていることにならない。」

「ゴッホの風景画は実に空間をうまく扱っている。デッサンなんか俺たちのように悩んでなくどんどん描いて、力強く自分の歌を歌っているよ。」

「いい環境を作れ。植物はその種を播かれたところで決定されてしまうが、人間は出ていくこともできるし、つくり出すこともできる。それが直接ではないが大きく影響してくる。どんなに技術が優れていようと、その人の日常生活に対する心の態度が豊かでないとその人の作品は枯れてくる。主体的に行動し、失敗したら全責任をかぶる。」

「曇っていてもいつも晴れのことを思ってなきゃ駄目だよ、若い人は。晴れてなきゃな！　いいな!!」



森　芳雄
Mori Yoshio
1908～1997年

略歴

1908年　東京市麻布区に生まれる
1921年　慶應義塾普通部に入学
1926年　本郷絵画研究所に学ぶ
1928年　「一九三〇年協会」入り、中山巍に師事
1929年　「一九三〇年協会展」に《冬の郊外風景》が初入選
1930年　「一九三〇年協会展」に《母子像》、「第17回二科展」に《静物》が初入選
1931年　シベリア鉄道経由でパリに渡りアトリエを借りる
1932年　秋のサロン・ドートンヌで《黄色のカーディガンの女》が入選
1934年　帰国
1936年　「第6回独立美術協会展」で海南賞受賞
1939年　「第3回自由美術家協会展」に出品し会員になる
1945年　空襲で恵比寿の家が全焼し戦前の作品を殆ど失う
1947年　「第1回日本アンデパンダン展」に参加
1950年　「第14回自由美術展」に《二人》を出品
1962年　武蔵野美術大学教授となる
　　神奈川県立近代美術館で「麻生三郎・森芳雄二人展」
1964年　「自由美術家協会」を退会し「主体美術協会」を結成
1972年　東京藝術大学非常勤講師となる
1997年　11月逝去　享年88歳

「画家森芳雄 平成元年80歳」（市村勲撮影）より

無題（林）

少女

企画展示 森 芳雄 没後20年 について

展覧会委員　山本靖久

森芳雄は、主体美術の創立に参加し、第1回展から亡くなる第33回展まで代表者を務めました。また昭和洋画史の記念碑的作品「二人」（1950年作）を描いた作家としても知られていますが、私は30年前に画集でこの「二人」を目にするまでその存在を知りませんでしたし、失礼ながらとっくに亡くなられた画家だと思っていました。そんな画家がまだご存命で主体展という団体にいる。会って、話をしたい。私が主体展に出品する切っ掛けでした。

第23回展の初出品から約10年間、まだ室内で煙草を吸えた精養軒などで作品や好きな画家の話など、隣に座り話ができたことは現在、私の財産となっています。今年が没後20年ということで、凄まじい程に、自己の目指す「造形」に真摯に向き合った画家がいたということを、改めて多くの方々に再認識して頂けたらという思いで、この展示を企画しました。

そして、出品する作品を選定する為に、成城にある森芳雄のアトリエを訪ねます。まず眼に入った造形の基礎体力となる膨大な素描（1950年頃の茶色く朽ちてボロボロ）からも、多様な造形思考への葛藤が感じられ、揺れ動く画家の心情が手に取るように伝わってきました。作品選定は悩みに悩み、困難を極めましたが、今展は、1930年に二科展に出品した「枝のある静物」から個展に出品予定であった未完成の1997年制作、100号のキャンバス（木炭で下画き）まで、タブロー、素描の21点の作品の他、前述した素描、画材、アトリエに置かれていた愛蔵品等を展示します。この展示から多くの方々の心に画家森芳雄の造形に対する熱い想いが届くことを切に願っています。

最後になりますが、作品や資料のご準備、そして、1つ1つの作品ついてエピソード等をお話し頂きながらの作品選定、ご出品に多大なご協力を頂きました娘さんである門田正子様に心より御礼を申し上げます。

「りんご」と「母子像」

中城芳裕

「りんご」(F4)

学生の頃から憧れ、1978年二十歳の頃、主体展に出品するようになったものの、画家 森芳雄と身近に会話できるようになったのは1995年秋の事である。それから亡くなるまでの約2年間に直接の面談11回、電話での会話も同じく11回である。何故回数まで記憶しているかというと、初めてのアトリエ訪問があまりに刺激的だったので、決心して、それから日記を付けるようになったからだ。以下はその日記からの抜粋である。

1995.9.28(木)
午後2時、初めて森芳雄先生宅を訪問する。浅野修氏と共に主体美術の会務に関する事で。3時間ほどの会談になる。画家として純粋な造形思考と追究を60年以上続けている人は、やはり存在感が違うと思う。瓢箪から駒のようだが、(私が勤務する女子校の卒業記念品として)絵を描いてくださる事になる。とても嬉しい。

9.29(金)
昨日のお礼の電話をする。「気を遣う必要はない。お互い絵描きなんだから、いい絵を描こう。」と言われ胸が高鳴った。

10.27(金)
夜9時、森先生から自宅に電話がある。「りんご」4号が完成したとの事。「皿とテーブルの関係に苦労したが、決まった感じがする。しかし、早く取りに来ないと、潰してしまうかもしれない。」とおっしゃる。

11.6(月)
森先生宅へ校長・PTA役員・美術科同僚と「りんご」を受け取りに行く。「お嬢さんたちのために描いてみた。」というお話。

11.17(金)
夕方、森先生に電話をする。アトリエ訪問で感銘を受けた校長が自身の退任記念品としても小さな「母子像」を描いて頂けないかという依頼を伝える。一応受けて頂ける事になり、ほっとする。

12.20(水)
森先生米寿のお祝いに出席する。成城学園前「マダムチャン」にて。

1996.2.25(日)
午前11時、森先生に「母子像」小品の制作状況を伺おうと恐る恐る電話する。「電話してくれて良かった。10日ほど経ったらまた電話をもらいたい。それまでに目途をつける。」との事。

3.8(金)
森先生から電話を頂く。「母子像」サムホールが出来上がったとの事。そろそろ電話しようと思っていたところ、先に電話を頂いてしまった。

3.14(木)
午後2時、森先生宅へ校長・美術科同僚と「母子像」を受け取りに行く。デッサン帳を沢山見せて頂いた。

3.30(土)
午前11時、紀伊國屋の個展に森先生と正子さんが来てくださる。じっくり時間をかけて拙作を観て頂き有難く思う。改めて「りんご」と「母子像」のお礼を言う。

あれから20年以上経つ。「りんご」と「母子像」は、数多くの歴代女子中高生の目に触れ、若い心は自然に和み育っている。

「母子像」(SM)

画家 森 芳雄の一断面

小菅光夫

森先生が亡くなってから20年も経ってしまったことが信じられない程、あの強烈な眼ぢからが時を超えて昨日のように蘇ってきます。森芳雄という戦後美術を代表する画家の果たした功績と、その人の発する言葉の強さと重さは誰も否定することのできない絶対的な存在でした。

私はその偉大な画家をひどく怒らせてしまったことがありました。それはまだ30代の若い頃のことで審査の進行係をしていました。

その頃の主体の審査はたいへん厳しく、1点や2点では入選が難しかったことや、声の大きい発言力のある会員がたくさん居て、喧嘩腰での審査が続く時、進行係はたいへんでしたが今ではそれも懐かしい思い出です。

丁度私が進行係で前に出ている時に、いわゆる主体調の絵とは異質の蟹を戯画化し、原色を多用した作品が出てきました。戦後生れの私は主体展の暗く重苦しい会場に少し抵抗を感じていたので、直に「落選」の声が上がり運ばれそうになった時、私は思わず言ってしまいました。「どうしてこの絵は駄目なのか。誰か推す人はいませんか」と。すると森先生がゆっくり席を立って絵の前に来られ、画面に顔を近づけながら此所が描けていないとか、質感が出ていないというようなことを言われました。そして私の所まで来てシャツの胸の部分を掴んで「この絵のどこが良いんだ」とあの鋭い眼で睨まれ問い詰められました。美術史の中で学んだ画家の顔がすぐ間近にありました。怒らせてしまったことの恐怖と恍惚とが入り交じって、足がガタガタと震えていたことを今も思い出します。

主体では珍しい色とモチーフを使って現代社会を風刺しているように感じることや、この絵の前に入選した灰褐色の流木を描いた絵が簡単に入って、どうしてこの絵は落選なのか判らないというようなことを、しどろもどろに震える声で答えたような気がします。一枚の絵にこれほど長い時間をかけた審査はなかったでしょう。それから除々にいろんな意見が出てきて、結局この蟹の絵も入選させて流木の絵と一緒に展示してみようということになりました。

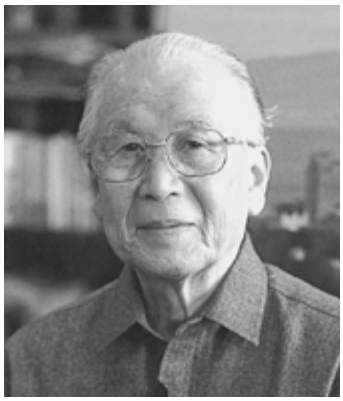
不安な夜を過ごし、退会しなければならないだろうと思いながら、重苦しい足取りで朝の上野公園を歩いて行くと、偶然にも一人で歩いて来た先生にバッタリ会ってしまった。強く叱責されると思いましたが、昨日のことをお詫びすると、全く逆に微笑みながら「絵描きはあれで良いんだ。思ったことを言わなければ絵描きじゃない。」と優しく云われたことだけは記憶に残っています。そして私の絵が見たいといわれ、絵の前でいろいろ批評してもらいましたが、動揺していたので最後に「頑張りなさい」と云われたことしか思い出せません。

審査や総会での先生の厳しい言動は、我々後輩に奮起を促す為のものだったと思います。あの朝、上野公園でお会いしたとき見た孤高の画家の淋しそうな笑顔と、励ましの言葉をかけてくれた優しさが、森先生の本当の姿だったのだと今も思っています。

蟹の作家はその後努力して会員になり今も主体の仲間として頑張っています。

惜別　井上俊郎さんを悼む

榎本香菜子



略歴

1924年　朝鮮咸鏡南道釈王寺に生まれる。
1945年　東京美術学校（現 藝大）工芸科卒業
1955年　自由美術家協会展に出品
1960年　個展（村松画廊）以後銀座界隈などで26回
1965年　第1回主体展　出品
1966年　第2回主体展にて佳作作家　会員となる
1975年　アジア・シルクロードの旅による取材開始
1981年　文化庁現代美術選抜展　出品
1993年　「素描・シルクロードの旅」出版
2001年　井上俊郎作品集「アジアへの旅」出版
2003年　「井上俊郎素描集」出版
2008年　「井上俊郎作品集・東洋の象徴美」出版
2016年　12月逝去（享年92歳）

▲2014年　第50回主体展「火焔山の麓を往くキャラバン」（F60）

井上俊郎さんが亡くなった。どんな時も決して声を荒げることのない、穏やかな言動に、どれだけ私達は救われたことだろう。とりわけ主体神奈川作家展においては、その存在のおかげで、タガが外れることもなく皆仲良くやってこられたような気がする。私が会員になった3年後の18回展（1982年）から20回展まで、主体美術の責任者として尽くされた。その時に、機関紙がB4版からB5版になり、審査の流れを合理化し、20回展には創立20周年記念の作品集を発行した。以来毎年、モノクロ写真ではあるが出すこととなり、現在のカラーの作品集に繋がっている。

いつもニコニコされていたので、きっとのんびりとお育ちになったのだろうと思っていた。しかし、朝鮮で生れ、7歳で満州事変。8歳の時に、父親が自殺、10歳で母親と2歳の妹を病気で失った。釜山に取り残された俊郎少年は日本に戻り、16歳まで親戚のもとで養育されることになる。東京美術学校（東京藝大）を卒業の年には東京大空襲にあい、死体の山を目の当たりにすることとなった。その衝撃から作品も生まれている。しかし、そういった背景を少しも感じさせない方だった。また自ら語りもしなかった。

50代から頻繁にシルクロードの旅に出られ、作品のテーマとなった。広大な風景、遺跡、そこに息づく人々。世界がどんなに悲惨な事態になろうとも、希望を失わず生きる、シルクロードの連作には、そんな井上さんの限りない夢、ロマンがこめられていたような気がする。

意外なエピソードを一つ。1974年（私は当時23歳）、アメリカから1年8ヶ月ぶりで戻った。その年の主体展会期中だったか、久しぶりに顔を合わせた時に、カタカタと振りながら、にこやかに差し出されたのが、クリスチャン・ディオールのロゴが入ったプラスチックの青い石鹸箱。「はぁ?」と解せない私。アメリカから戻ったばかりで、当時、大ヒットしていた、かぐや姫の「神田川」♪小さな石鹸カタカタ鳴った♪なんて歌、知る由もなかったのだ。遊び心いっぱいの井上さんからのプレゼント、懐かしく思い出される。

晩年、老人ホームで過ごされたが主体美術の会費を納められ、旧作を出品して下さった。いよいよ体調を崩された時、「主体美術のみんなが心配しているよ」というお嬢さんの言葉に、一筋の涙がつたったという。

井上さん、本当にありがとうございました。感謝の気持ちでいっぱいです。天国にいる主体美術のお仲間と楽しく、雲の上から見守っていて下さい。

五月晴れの日に

惜別　宮崎照雄さんを偲んで

有馬久二

略歴

1926年　福岡県に生まれる。
1949年　福岡県展　知事賞　上京
1964年　主体美術協会創立に参加　会員
　　個展（椿近代画廊）
1970年　個展（画廊グリシエン）
1975年　個展（夢土画廊）
1977年　渡欧1カ月のスケッチ旅行
1986年　文化庁現代美術選抜展　出品
1987年　個展（画廊ジャパンプレス）
1998年　個展（紀伊国屋画廊）
2017年　3月逝去（享年91歳）

▲2015年　第51回主体展出品「都会」（F100）

宮崎さんの訃報に接して思い出すのは、穏やかでニコニコとした風貌です。いつも若々しく享年91歳と聞いて、えっ〜、そんな歳だったの?　といった印象で俄かには信じられません。

初めてお会いしたのは、私が27歳位の頃、宮崎さんが50歳位だったような。先輩でありながら若輩の私等に友人的なお付き合いをしてくれました。飲み会等で、請われれば躊躇うことなく朗々と歌声が響きました。サンタルチア、瀬戸の花嫁、今でも耳に残ります。

そう云えば魚釣りに行きました。宮崎さん、佐藤善勇さん、そして私の三人。中央本線沿いの桂川。あの時宮崎さん何歳だったのか?　川原までの急勾配の滑り易い細道を、私は宮崎さんの足元を気遣いながら先を歩きましたが、そんな気遣いは無用でした。魚釣りと云っても釣り糸を垂らして、渓流の冷たい水で冷えたビールを飲むのが目的の川遊びのようなもので、釣った魚をどうしたのか覚えていません。多分一匹も釣れなかったのでは。

40回展記念誌の［作家の言葉］の中に、宮崎さんは「造形とは人間とは不思議なもので深い」という一文を残していますがその作品は生涯、人間をテーマにしています。「顔シリーズ」「踏み切りを待つ人」「雑徒の群像」等生活実感のある具象の作品、そして晩年に至る都会をテーマにした宇宙空間的半具象の作品等、いつもテーマは“不思議で深い人間”でした。2015年89歳、第51回主体展出品作品「都会」F100、最後まで勢力的に描き続けた宮崎さんに敬意を表し、ご冥福をお祈りします。

惜別　奥井章夫さんを偲ぶ

津田益夫

略歴

1925年　京都府に生まれる。
1950年　関西美術院　修了
　　第14回自由美術家協会展　初入選
1955年　京都美術展出品（市長賞他連続4回受賞）
1957年　朝日新人展招待出品
1961年　自由美術家協会　会員
1962年　個展 以後10回以上（東京、小倉等）
1964年　自由美術家協会を退会し、主体美術協会を結成
1980年　京都美術展、京展審査員（以後6回）
1986年　「京の四季展」に府より招待　日本各地で開催
1990年　現代京都の美術工芸展　招待出品
2017年　5月逝去（享年92歳）

▲2011年　第47回主体展出品　「樹」F30

奥井先生は昇天され森の精霊となられた。私の知る限り奥井さんの絵の題材は一貫して森であった。人間臭のあるものは扱わず、森と樹木の中に造形の根源を求め続けられた。

京都盆地を南北に流れる鴨川に、北東から高野川が合流して鴨川デルタをつくる。そのデルタ地帯に流鏑馬の神事で有名な下鴨神社がある。神社を包むように繁るのは糺の森である。ニレ科の樹木等が原野をとどめて鬱蒼と繁り樹木のドームとなり、その中にいくつもの清流が走り、人々の憩いの場や納涼の場となっている。糺の森は奥井宅から半キロほどのところにあり、よく通い馴染まられたことでことであろう。糺の森について機関紙「主体美術1979」に奥井さんの記事がある。「見つめられる森から考える森、教えられる森になる。自己を見つめる森になり、森そのものが自己になる」と。

鷹揚で屈託のない性格の人、出品時になると頼まれれば気軽に何処でも単車に乗って駆けつけてくださった。ご子息はなく奥さんと二人きりの生活であったが、互いに初老期を迎える頃に連れあいを亡くされ、縁者もなく孤独の身となられた。出品の時期になると120号キャンバスが業者から届けられ、森閑とした自宅アトリエで制作に奮闘された期間が何年続いたであろうか。

ひとりになられてから奥井さんは市内の温泉施設巡りを楽しみにしておられ、私もよく同伴した。ある施設では溺人となって裸で担架に乗せられ救急病院に運ばれた。私は同伴者だったので署員の質問に答えなければならないハメになった。約3時間の後に無事退院できたわけだが、考えてみると露天風呂での奥井さんは湯水に潜り水中呼吸をしていただけだったのでは、というのも奥井さんは平泳ぎの名手、国体で地区代表で活躍された経歴の持ち主だった。その時たまたま隣にいた浴客が、老体が仰向きで水中に没し、ざんばら髪だけ浮いている状態に慌てふためいたのも無理からぬこと。事の真相を訊いてみることはできなくなった。

5月9日、奥井さんが富山の地で老衰のため亡くなられた。初夏の糺の森を訪ねた。木々が高天井となって連なり、太陽を遮り薄暗い空洞がどこまでもつづいているようだった。訪れる人が多かった。連れ立って歩く人々、談笑する人々、ひとりで読書したりもの思いに耽る人、やがて人々は過ぎ去っていなくなる。が、永遠は在りつづける。奥井先生は精霊となって糺の森の伽藍におられます。お会いしたいものです。ご冥福を祈ります。

研究部よりお知らせ

第53回主体展　研究講演会

野見山 暁治氏 講演

「森 芳雄の生きた時代」

■9月2日(土)14:00～15:00

■東京都美術館講堂（入場無料）

今年は主体美術の創立に深く関わった、森芳雄氏の没後20年にあたります。そこで、絶筆となった絵画、直筆原稿、遺品などを企画展示することになりました。それに伴い"森芳雄の生きた時代"の空気をお伝えすべく、野見山暁治氏に、ご多忙の中講演をお願いいたしました。とても貴重な講演会になることと思います。どうぞ、お誘いあわせの上、ふるってご参加下さい。

第53回主体展

アーティスト・トーク ▶ 会場研究会

◀▲52回展でのアーティスト・トーク

主体展会場での会員によるトークイベントです。現在の会員作家の仕事、その表現をよりわかりやすく鑑賞者にも紹介したいという趣旨です。今年も会期中2回に分けて行います。トークはひとり15分、その場で来場者との簡単な質疑応答もします。その後は時間の許す範囲で会員･出品者相互の会場研究へと移ります。ふるってご参加ください。

9月1日(金)
14:00～15:30
主体展会場

●担当会員
栗﨑　進一
見藤　瞬治
水野　博子
（五十音順）トーク順は未定

9月10日(日)
14:00～15:30
主体展会場

●担当会員
有馬　久二
石井　晴子
保坂　　淳
（五十音順）トーク順は未定

アトリエ訪問 vol.1

聞き手
研究部／ 榎本香菜子
藤田　俊哉

「第三の男」に魅せられて
── 佐藤善勇さん

佐藤善勇
1941年青森県生まれ。中学卒業後は昼間、弁護士事務所で働き夜間高校に4年通う。絵を志すため上京。桑沢デザイン研究所教務課で働き、夜は新宿美術研究所で学ぶ。その間「第三の男」の魅力に取り憑かれ、すべてペンによる自身の文と書き写した資料、写真などをまとめた手作りの本を2冊完成した。

■青春時代のほぼ10年を「第三の男」の本作りに費やしています。何がそこまで惹きつけたのでしょうか。

佐藤：お金が無いときは鉄クズ拾って売り、映画を見ていた位、好きでしたね。でも、中学2年の時に見た「第三の男」は、今まで見たこともない不思議な印象を受け、何か忘れられない強烈なものがありました。暗闇から浮かぶ、オーソン・ウェルズの顔、それに強く惹かれました。それに、アントン・カラスのツィター（弦楽器）の演奏が全シーンにわたり緩急自在に表現し、主人公の心理や廃墟と化したウィーンの夜の街並みをより強烈なものにしていました。終戦直後のその時じゃなければ撮れなかった映像、素晴らしい原作と音がピタッと合っていたのです。ことに「ハリー・ライム」のテーマは素晴らしく、プレーヤーも無いのにシングル盤を買い、それを見ているだけで「第三の男」が蘇ったものです。ラストシーンも印象的でした。こんな凄い映画をどんな人達がどんな過程で作り上げていったのか、興味は尽きませんでした。

■どんな日常から本は出来上がっていったのでしょう。

佐藤：僕は書くことが好きだったんだね。中学の時は「第三の男」を見た時の印象を書きとめておきたかったので、文だけじゃなく映画のシーンをペンで描いたり楽しんでやっていました。夜間高校に進学しますが、授業より人生を語ってくれるような素晴らしい先生がいました。高校の機関誌に映画のことを寄稿したり、古本で関連するものを集めてスクラップしたり、図書館で原作者やプロデューサーのことが書かれてあるのを見つければ、通い詰めてすべて書き写すということをしていました。当時はコピー機などないですから。

高2の秋、勤めていた弁護士事務所の先生が「佐藤君、将来君は何をやるんだ」とまともに質問され、こちらも真剣に考えてしまって。生活環境を考えると厳しかったのですが、結局、自分にとっては絵を描くことしかない。ならば絵を勉強するには東京に行かなくてはと。

東京に出たら、神田、高田馬場と古本屋には「第三の男」の資料がいっぱい。関連したものどんどん買い集め、「キネマ旬報」バックナンバーにシナリオが載っていると知れば、セット販売で高くても給料はたいて買い求めましたね、高校時代も上京してからも昼間働き、夜勉強していたのは同じです。家に帰ってから、映画の資料まとめたり、書いたり、描いたりすることがワクワクするほど楽しかったのです。今思うと、絵でどうなるかわからない不安な日々、心の支えになったのが本作りだったと思います。若かったからできた、今じゃとてもできないな。

■アントン・カラスの音楽に惚れ込んだのですね

佐藤：60年代、東京第一フィルムという配給会社からリバイバル上映される時には、青森時代と東京時代の自分で作った本を抱えて、宣伝部の筈見有弘さん（'97年没。'75年から映画評論家）に見せたの。そしたら、すごく喜んでくれて試写会で写真撮ってもいいよって許可得たんです。もう嬉しくて最初から最後まで撮りまくりました。後ろの席の人にうるさいと言われましたけど。それから試写室にも行き、サウンドトラックからテープにしてもらいもらいました。オープンリールで破損もしやすいと思い、それをLPレコードにもして、レコードジャケットも自分で作りました。後年それを又、カセット・テープにもしました。アントン・カラスの音が無かったら本作りするまでにはならなかったかもしれません。その位魅了されました。今日まで絵を続けてこられたのは「第三の男」という映画に出会ったことが大きいと思っています。

後記

帰り際に、貴重なカセット・テープをちょっと聞かせていただき取材を終えました。紙面を埋め尽くす几帳面な小さな文字と、映画シーンの絵。新聞の映画広告に至るまでスクラップ、情熱にあふれた手作りの本に圧倒されました。そこには佐藤さんの青春が詰まっていました。テレビも無い、コピー機も無い、パソコンも無い時代、人は今よりも豊かな夜を迎えていたかもしれません。小樽を描いて40年の画家の若き日々を垣間見たひとときでした。

6月30日　研究部で取材　　榎本香菜子

▲左は中学、夜間高校時代、右は上京してからの手作り本。

▲細かいペン字でぎっしり埋め尽くされ、水彩・パステルによる映画シーンの絵も美しい。

◀中学生の時に書いた映画の感想文とペン画

展覧会記録

2017年1月末～2017年8月末

■M-art'79展（山﨑弘他）
1月30日～2月4日
画廊宮坂（銀座4）

■柿崎覚個展
2月2日～2月12日
たましんギャラリー（立川市）

■櫛の会展（石井晴子他）
2月6日～2月11日
ギャラリー暁（銀座6）

■ちば主体三人展（佐藤セツ子、直井昭子、鳩貝悦子）
2月7日～2月12日
ギャラリー宇（松戸市）

■第1回7の位相（齋藤典久他）
2月9日～2月20日
ヒルトピア アートスクエア（西新宿）

■呼展（河西恭子他）
2月11日～2月16日
Gallery風（銀座8）

■柿崎覚個展
2月28日～3月10日
NICHE GALLERY（銀座3）

■水村喜一郎油絵展
3月2日～3月8日
ギャルリー・コパンダール（京橋2）

■RINN凛（松本恵美他）
3月4日～3月9日
Gallery風（銀座8）

■色の美学・形の詩学（柏木喜久子）
3月6日～3月11日
ギャルリー志門（銀座6）

■齋藤典久展
3月13日～3月25日
ギャラリー・オカベ（銀座4）

■視点〈鼎の眼〉展（山本靖久他）
3月13日～3月19日
あかね画廊（銀座4）
3月23日～3月28日
ギャラリー唐橋（滋賀県大津市）

■小林宏至展
3月13日～3月24日
ギャラリーアルトン（南青山3）

■ミニミニ100選展（柏木喜久子、長沢晋一他）
3月20日～3月25日
ギャラリー暁（銀座6）

■6人展（黒木孝子他）
3月21日～3月26日
さいとう Gallery（札幌市）

■第4回 ポローニア絵画展（種倉紀昭他）
3月21日～3月26日
埼玉県立近代美術館地下第3展示室

■横井薫鉛筆ミニ作品展
3月22日～4月2日
ギャラリー伊達（福島県伊達市）

■第51回主体美術中部作家展
3月28日～4月2日
東桜会館ギャラリー（名古屋市）

■第45回主体美術武蔵野作家展
3月28日～4月2日
埼玉県立近代美術館B1第一展示室

■風の音 ー10の旋律ー（水谷幸子他）
4月1日～4月6日
Gallery風（銀座8）

■大口満絵画展
4月1日～4月9日
大嶋画廊2階ギャラリー（上越市）

■第7回輪展（長沢晋一他）
4月3日～4月8日
銀座K's Gallery（銀座1）

■第49回主体美術神奈川作家展
4月4日～4月10日
横浜市民ギャラリー（横浜市）

■四人展（榎本香菜子、中城芳裕他）
4月6日～4月18日
画廊・珈琲Zaroff（渋谷区初台）

■11の指標展（長沢晋一他）
4月10日～4月15日
画廊るたん（銀座6）

■中島佳子展
4月12日～4月21日
ギャラリー彩 4階（名古屋市）

■OVAL展（榎本香菜子他）
4月17日～4月23日
画廊 楽I（横浜市）

■永瀬美緒・小林宏至2人展
4月20日～4月25日
池袋東武8F催事場（池袋）

■豚 x 鶏 福田和幸・大西佐頼2人展
4月25日～4月30日
ギャラリー宇（松戸市）

■返町勝治個展
5月8日～5月14日
ギャラリー八重洲・東京（中央区八重洲）

■HANAフェスタ'17（鳩貝悦子、松本恵美他）
5月8日～5月13日
Gallery風（銀座8）

■時のかたち展（中嶋修、結城智子他）
5月9日～5月14日
横浜市民ギャラリー（横浜市）

■NATURE Grow sAi 個展
5月9日～5月14日
アートスペースPamina（渋谷区神宮前）

■流の会展（續橋守他）
5月10日～5月16日
ヒルトピア アートスクエア（西新宿）

■保坂淳作品展
5月16日～6月25日
千葉県文化会館大ホールギャラリー（千葉市）

■主体ちば作家展2017
5月30日～6月4日
千葉市民ギャラリー・いなげ（千葉市稲毛区）

■木村正恒展
5月30日～6月4日
ギャラリーヒルゲート1階（京都市）

■グループ「風」塚本照子・田中和枝 2人展
6月2日～6月29日
豊田視聴覚ライブラリー（豊田市）

■第3回創生の輪（續橋守、中城芳裕、福田玲子他）
6月5日～6月11日
画廊 楽I&Ⅱ（横浜市）

■初夏のAllumage展（柏木喜久子他）
6月5日～6月10日
銀座K's Gallery（銀座1）

■石川忠一を囲む会（柏木喜久子、長沢晋一他）
6月8日～6月14日
ギャラリー絵夢（新宿3）

■2017 CAF.N金沢展（長沢晋一他）
6月13日～6月18日
金沢21世紀美術館（金沢市）

■根岸正先生を囲んでの展覧会（山本靖久他）
6月20日～6月25日
清瀬生涯学習センター（清瀬市）

■第2回藤田俊哉油絵展
6月21日～ 6月27日
松坂屋静岡店本館6階美術サロン（静岡市）

■ECRU展（山田加代子他）
6月21日～ 6月25日
世田谷美術館区民ギャラリーB（世田谷区）

■キリスト教美術展（續橋守、中城芳裕他）
6月27日～7月9日
銀座教会東京福音館センター（銀座4）

■河内一展～青春のかけら～
7月1日～11月30日
河内一アトリエ（新発田市）

■金子恭子作品展
7月10日～7月16日
銀座澁谷画廊（銀座7）

■日本ガラス絵協会展
（浅野修、中城芳裕、中村輝行他）
7月10日～7月22日
gallery一枚の絵（銀座6）

■GOCHI partⅧ（長沢晋一他）
7月17日～7月22日
ギャラリー セイコウドウ（銀座1）

■第50回主体美術秋田作家展
7月22日～7月25日
アトリオン2F（秋田市）

■岩井啓二展
8月1日～2018年7月31日
はまゆう山荘（高崎市）

■脈・FUKUSHIMA2017展
（横井薫、山田礼二、大橋美保他）
8月2日～8月6日
とうほう・みんなの文化センター（福島市）

■女を描くグループ展（佐藤善勇他）
8月4日～8月9日
ギャラリーろあ（八王子市）

■有難う。本当に有難う! 林紀一郎展
（榎本香菜子、柏木喜久子、佐野未知、返町勝治、續橋守、中村陽子、原田文子、福田玲子他）
8月14日～8月19日　ギャラリー暁（銀座6）

■リオンソー ルネサンス2017（小林宏至他）
8月16日～8月21日
日本橋三越　美術特選画廊（日本橋）

■第7回〈みすずかる光と風〉展（吉田正他）
8月21日～8月27日
あかね画廊（銀座4）

■ミエのかぜⅢ（オノ・ミチ・ヒロ他）
8月26日～8月31日
銀座かわうそ画廊（中央区京橋3）

■a.six展（岩井啓二、小野由紀子、原田文子、松本恵美、水戸部千鶴、本木工ツ子）
8月28日～9月2日　櫟画廊（銀座7）

訃報　主体美術協会会員　野辺田紀子さんが亡くなられました。2017年7月14日、享年75歳。ご冥福をお祈りいたします。　※追悼文は次号機関紙102号にて掲載いたします。

2017年第53回主体展

本　　展／東京都美術館（上野公園）
2017年9月1日（金）～9月17日（日）16日間
9:30～17:30（最終日は14:00まで） 9/4（月）休館

公募搬入／2017年8月22日（火）・23日（水）
東京都美術館バックヤード 地下3階

名古屋展／愛知県美術館8F
10月17日（火）～10月22日（日）
10:00～18:00（金曜日20:00まで 最終日16:00まで）

神 戸 展／原田の森ギャラリー
12月20日（水）～12月24日（日）
10:00～18:00（最終日12:00まで）

※いずれの美術館も入場は閉館30分前まで

※展覧会案内状を機関紙担当、ホームページ担当にお送りください。

編集後記

ようやく101号をお届けすることができました。大幅なリニューアルには至りませんでしたが、「森芳雄没後20年」特集として、これまでにないレイアウトにしてみました。また、昔より主体会員同士のコミュニケーションが淡泊になったというアンケート結果を受けて、少しでも相互理解、会話の糸口になるのではと思い、新企画の「アトリエ訪問」を研究部と一緒に考えました。こういったネタを探していますのでみなさんご協力下さい。

世界情勢がだんだんきな臭くなってきました。まさか最悪の展開はないだろうと、戦争前夜には誰もが思っていたはずなのに…　とならないことを祈りつつ、今年も相変わらず終戦記念日が終わり、主体展搬入の日が迫ってきます。　（山田）